

Eureka IX

六年制通信 No.18 令和3年10月1日(金)号

自分だけが、という感覚

うすうす感づいてはいたのですが、自分は相当勉強のできない人間だとはっきりわかったのは学生の時でした。周りには勉強をしない人たちもたくさんいましたから、特に誰それと自分を比べて優越感も劣等感も持つことはなかったのですが、ある時先生が「あれ、面白いよね。君も読んでごらんよ」と推薦された本が全く面白くなく、というか読めなかったのですね。難しすぎて。今思えばあれがきっかけだな。それで、読めなかったことを正直に申し上げると、他大学の輪読会（原書を読むサークルみたいなもので先生方数名と学生が数名のごく小さな集まり）を紹介されたのですが、先生方はともかく私と同年の学生たちが非常によくできるのですね。ショックでした。私だけが会話についていけない、そんなことがよくありました。恥ずかしかったけれど仕方がない、できないんだから。

しかし、できないんだから仕方がないというのは当時を思い返しての今の感想で、当時はひたすら落ち込みました。どうして自分だけできないのだろう、どうして自分だけ理解力が劣っているのだろう、そして、絶対みんな私のことをバカだと思っているだろうなあと。悩みましたね。他人と比べて自分のできなさ加減を悩むのは、周囲を気にしているからだと思うかもしれませんが、実は周囲がよく見えていないのですね。自分の作った殻の中でぐるぐる回っているだけだということに、なかなか気づかないものです。私の場合、劣等感に悩んだわけですが、どうして自分だけが、という感覚が拭い去れなかったから苦しかったのです。自意識過剰というやつです。これが実に厄介でね。自意識過剰な人、誰でもある時、特に若い時にはなりがちですが、自分しか見ていませんから、例えばポテトチップスの袋を開けるのに庭木の剪定バサミを持ち出して、どうしてこんなに開けにくいのだろう、なんて考え込んでいるような、そんな漫画みたいな現象があるのですね。

自意識の強い人は、自分は変わる、自分が変わらなければいけない、ということをおぼえてしまいます。そして、自分は一步も動かずに周囲の人に自分を中心に動いてくれることを期待ないしは要求します。そして、期待ないし要求していることにも気づきません。ここ、辛いところですね。

私は同時代の人ではなく圧倒的な実力を備えた先生方に目を向けることで、自意識過剰ゆえの劣等感から解放されましたが、もう一つお釈迦様の「諸行無常」「諸法無我」に救われましたね。もう一つ「涅槃(ねはん)なんとか」と合わせて三法印でしたか。涅槃なんとかは忘れましたが、諸行無常は「世の中は移ろう」ということですね。落ち込ん

でいると、ずっと、一生、この状態が続くように思うものです。しかし世の中は変わっていきます。諸行無常には「世の中は自分の思うようにはいかない」という意味もありますね。また、諸法無我は「世の中の現象はすべてつながっている」ということ。ですから自分の「我」がそのまま通ることなどありえないという意味です。ああ、本当にそうだなと思った記憶があります。

また、こうも考えました。今、外にいる人たち、道を歩く人たち、自転車に乗っている人、バスや自動車に乗っている人々、君もその一人にすぎない。私ももちろんその一人です。私たちは多くの、非常に多くの市井の人の一人にすぎないのです。

若いから時間はある、しかし名もない、力もない、そんな君たちに大きな関心を寄せる人はまだいないでしょう。一時的に関心を寄せ、悪意を持って接したりするかもしれません。しかし、その悪意すら、諸行無常です。去っていきます。自意識に苦しむ若者がいたら、このことを知ってほしいと思います。そして、学校という社会の中で強く朗らかに成長して行ってほしいと願っています。

今週のおすすめ

- ・ 東野圭吾 『透明な螺旋』 (文藝春秋)

ガリレオこと湯川学の最新作。『白夜行』以来、東野さんの本は出たら買って読むことに決めているので、今回も本屋さんから帰ったらすぐに読み始めましたが、う〜ん、ミステリーの要素はほとんどなかったかな。湯川ファンへのサービスと言いましようか。湯川の周辺の物語ですね。

それで、ちょっと初期の作品が読みたくなって、この連休中に『眠りの森』と『悪意』、そしてこれは短編集ですが『天使の耳』を楽しく読みました。中でも『天使の耳』は一つ一つに秀逸なトリックがあって、それぞれが一つの長編小説になりうるのではないかと思いましたね。皆さんも手に取ってみて下さい。

ちなみに以前『女か虎か』を紹介しました。美しい青年が王女と恋をした。これが王様にばれて青年は裁きを受けることに。闘技場に引き出され、青年は二つの扉のうち一つを開けるよう命ぜられる。一方には飢えた虎、もう一方には美しい女性。虎を選べばもちろん殺される。美女を選べば結婚し仲良く暮らさなければならない。王様も王女も闘技場で見ている。青年は王女ならどちらが虎でどちらが美女かを探ってくれ、自分を助けてくれると確信している。王女は期待通り情報を手に入れるが、扉の奥の美女はどうやら青年を愛しているらしいことまでわかってしまう。虎の扉を開ければ愛する青年は殺される。美女の扉を開ければ青年の仲睦まじい結婚生活を見ることになる。青年は王女を見る。王女は青年にだけわかる一瞬の手つきで「右の扉を開けよ」と合図する。青年は躊躇なく右の扉を開けた。と、ここで物語は終わり。あとは読者のお好きな結末にして楽しんで下さい、という小説。

で、東野さんの短編集『あの頃の誰か』の中に「女も虎も」を見つけまして、読んでみたらこの『女か虎か』を下敷きにしていました。面白かったなあ。

BGMは Kaoma の *Lambada* でした…。